

Hardy の melancholy romanticism について

— 過去への関心 —

大 榎 茂 行

Hardy の小説は普通 realism の範疇に入れられている。それは彼が常に人間存在のありのままの姿を詳細に観察し、人生の真相を明らかにせんとすること、つまり男女の人間の一生の運命を明らかにすることを目的とし、その様々な現象をことさら単純化したり誇張したり、特に美化したり醜くしたりすることなく、あるがままに真実を描き出そうとする realistic な態度によるものであろう。かくして彼の得た人生の実相は、たとへ善人であろうと——実際彼の描く主人公に異常な悪漢は存在しないが——その人間の意志とは無関係に存在するある巨大な力によって支配されている人間の不幸な姿であったのである。

普通一般に realism に対立するものとして romanticism が考えられる。それは romanticism が一つの理想主義であるとすれば realism は没理想主義であるとされるからであろうか。然しもし真の realism が人生の真実の姿を探求しようとするものであれば、単に現象のあるがまゝの姿をみるのではなくて、その現象の意義つまりその現象の背後にあるものまで追求して行かねばならないのではないか。その背後にあるものを捉えるその捉え方に、その人個有の方法と傾向が現われて来る。それが芸術家、特に作家である場合、小説家であるにせよ詩人であるにせよ、普通一つの imagination ないしは直感とでも言えるものによってその実体が捉えられる。その想像力が何によって刺激されるか、それがどの様な方向を取るかによって作家の特異性が現われて来る。

Hardy は1887年1月、その日記に次の様に記している。

‘...I want to see the deeper reality underlying the scenic, the expression of what are sometimes called abstract imaginings.
 ‘...The exact truth as to material fact ceases to be of importance in art — it is a student’s style — the style of a period when the mind is serene and unawakened to the tragical mysteries of life,...’ 1)

と述べ、更に *The Woodlanders* を書き終えた1887年2月13日に

‘I was thinking a night or two ago that people are somnambulists — that the material is not the real — only the visible, the real being invisible optically...’ 2)

とも書いている。ここで繰り返し述べられているように、真の實在は視覚的には目に見えないものなのである。具体的な事実に関する正確な真実は、芸術においてはもはや重大ではない。存在するものの背後にある、より深い實在が見たいのであると Hardy は述べている。つまり Hardy の realism は単なる視覚的真実の姿に訣別して真にその奥処にある reality の追求にまで至る。そして彼が想像力を通してその實在を認識する方法は、ある種の mysticism とも romanticism とも言うことの出来る独特の方法を帯びて来ている。私はこれが一種の romanticism に通じるものであると思う。一般に言う romanticism は様々な方向をとっているので、Hardy の場合それに一つの制限を加えなければならない。幸い Hardy 自身が ‘a melancholy romanticism’ という言葉を *The Woodlanders* で用いているが、‘melancholy’ という語が制限を加えているし、その言葉の意味するものが彼の特徴を表わしているように思え、しかもそれが又 Hardy の創作の一つの鍵とも考えられるので、その語を借用し、それがどういう意味をもって使われてい

1). 2). F. E. Hardy : *The Life of Thomas Hardy*. p. 185~6.

るかを調べることから Hardy の romanticism の一面を探って見たいと思うのである。

自分が手塩にかけて教育した娘 Grace を名門の出で学問のある将来を約束出来る者と結婚させたいと願っていた Melbury は医師 Fitzpiers の結婚申し込みを喜んで承諾する。その事を娘に話す為に Grace を Fitzpiers の荘園の見える丘へ散歩に連れ出し次のように説明する。

‘That’s where Mr. Fitzpiers’s family were lords of the manor for I don’t know how many hundred years, and there stands the village of Oakbury Fitzpiers.... you can’t help being happy, Grace, in allying yourself with such a romantical family. Why, on the mother’s side he’s connected with the long line of the Lords Baxby of Sherton. You’ll feel as if you’ve stepped into history.’¹⁾

こういう古い家柄の貴族の家庭を ‘romantical family’ と表現し、それに対して執拗な盲想にも似た憧憬を抱いている。従ってそういう家系と縁組をすることを ‘happy’ だと信じ込み、 ‘step into history’ だと表現する。しかも直ぐ続けて、

‘...You’ll be living a high, perusing life,... he’ll no doubt ... keep a stylish carriage, and you’ll be brought to know a good many ladies of excellent society. ...’²⁾

と述べている。すると、ここに述べられた ‘romantical’ という意味は、貴族という豪華で華麗な上流社会に対する平民の憧れと、同時に過去何代かに渡って正統な家系のもとに存続するその歴史性の持つ幻想的魅力を意味している。Melbury は少くともこういう過去の幻想に目を奪われて現実の Fitzpiers の実体を見抜くことは出来ない。然し一方 Grace は、“They are not lords of the manor there now”³⁾と現実にあるものに目を向けて、過去の

1) 2) Thomas Hardy : *The Woodlanders*. p. 203 (Macmillan, Pocket edit.)

3) *Ibid.*, P. 202

亡びた栄光は問題にしない現実性があった。然し後日、鍵形の柱頭 (crochet capital) を冠した柱に支えられた円天井のある古い Fitzpiers の館趾を訪ねた Grace は、そこに繋がれている仔牛達がロマネスク風の彫刻をなめづりまわっているのを見て、それは過去の芸術の頽廃だと感じ、Fitzpiers の姿が彼女の想像の中で ‘a melancholy romanticism’ の色調を帯びて浮んで来るのである。(…for the first time the aspect of Fitzpiers assumed in her imagination the hues of a melancholy romanticism.) そして ‘In an excitement which was not love, not ambition, rather a fearful consciousness of hazard in the air’¹⁾ にとりつかれて、Giles Winterborne を振り切って Fitzpiers との結婚に踏み出すことになる。この場合、Grace の感じた感情は過去の名門の衰退に対する哀れさとそれが不当に扱われてはならないという感慨、及び ‘The idea of so modern a man in science and aesthetics as the young surgeon springing out of relics so ancient was a kind of novelty she had never before experienced’²⁾ と説明されるように、非常に古いものから非常に近代的なものが生れ出ているという妙な感慨であったのである。従って Melbury のような将来の豪華な生活に通じると言うような fantasy ではないが、やはり過去の名家のもつ不思議な力——‘a fearful consciousness of hazard’ (運まかせという恐ろしい意識) の状態に引き込む魔力的な力に Grace は魅せられているのである。しかもこれは Grace をして自然児 Giles から Fitzpiers へと転じさせ、不幸な生涯を送ることになる重大な契機として使用されているのである。

以上要約すれば、Hardy が Grace のこの状態を説明するのに用いた ‘a melancholy romanticism’ は、過去何代かに渡って栄華を極めた地方の豪族、貴族のもつ過去の不思議な力に畏敬を感じ、又夢を托して充分な理性的な判断も下せぬままに我知れず引き込まれて行く心的傾向を意味しており、

1) Ibid., p. 204

2) Ibid., p. 204

それが不運の一生に導く非常に重要な意味を持っているということである。

さてここで注意すべきは、この ‘*melancholy romanticism*’ という心的傾向を引き起こす基盤である過去というものに、理性的理解を超越したある神秘的な力が与えられていると言うことである。しかもそれは無知で善良な *Melbury* のような男ばかりでなく、教育を受けているはずの *Grace* の理性さえも攪乱し、「運まかせ」のような不思議な興奮状態にさせてしまうということである。つまり過去の遺跡、遺物、迷信、自然がただその外観をとどめているだけでなく、その背後に人間の生涯を支配するある何物かが潜んでいるのであって、それが生きた生命体として認識され、現在に依然として存在し影響を与えていると言うことである。この認識の仕方がある種の *romanticism* に通じるものであると思うのである。ここで *romanticism* を定義することは出来ないが、*Britanica* によると ‘*The emphasis on feeling is found in most of the romantic definitions of poetry*’ であり、

‘*The judgement, or conscious control, was felt to be secondary; the poets of this period accordingly lay great emphasis on the workings of the unconscious mind, on dreams and reveries, on the supernatural or on the childlike or primitive view of the world, ...*’¹⁾

と云われるように、文明化された理性の抱束から解放された自由な精神、感情をその本質とし、想像力を媒介として様々な方向へ発展するが、過去に関心をもつ歴史意識も *romanticism* の一つの特徴であると言うことが出来る。つまり自然を愛し、超自然力に思いを潜め、時間的空間的に遠方にあるものに憧られることも *romanticism* の傾向であるとすれば、*Hardy* の場合も特に過去を土台とした物の見方、過去との絆を解いては事象を考えることが出来ないという意識があることを無視することは出来ない。従ってある

1) *Britanica*. Vol. 8., p. 584.

事象なり現象の背後にある reality とは生命体としての過去の歴史でありそれが脈打っているということである。

例えばその典型的な表現の一例としてあの *The Return of the Native* における Egdon Heath の創造を見ることが出来よう。

The sombre stretch of rounds and hollows seemed to rise and meet the evening gloom in pure sympathy, the heath exhaling darkness as rapidly as the heavens precipitated it. ...When other things sank brooding to sleep the heath appeared slowly to awake and listen.¹⁾

このように有史以前の過去から 古色蒼然とした不変の衣をまとい存在する Egdon はおきあがり (rise), 闇を吐き出し (exhale), きき耳をたてる (listen) 等と表現されるが、これは擬人化された単なる rhetoric でなくて事実それが生きているという実感と認識から来た表現であると言える。事実またその塚の下には先住民族のケルト人が潜んでいるのである。しかもこの Heath はそれが生命体であるが故に Eustacia に又 Clym の上に決定的な力を与へ二人を破滅へと導く要因となる。このように Hardy の生命体としての過去についての認識は *The Return of the Native* では Egdon という自然に端的に表現されているが、*The Woodlanders* や *Tess of the d'Urbervilles* 等では特に古い名家、豪族の館趾に表現されて来ている。先程みた Oakbury Fitzpiers の館の廃墟は、それ自体 Egdon のような生命の息吹は直接感じることは出来ないが目に見えぬ得体の知れない力で Grace の理性を攪乱する神秘的な色彩をおびて表現されて来ている。これは先程の Melbury の態度の中に見られるように、平民の貴族に対する階級的偏見による fantastic な憧れとして見做すばかりでなく、特に Grace に見られるように、それ以上に過去の歴史性の意味する魔力的な作用を感じないわけには行かない。つまり Hardy は過去は一つの生命体として常に我々

1) T. Hardy : *The Return of the Native*. (Library edit.) p. 4.

の周囲に目に見えぬ力で網を張っており、我々人間、特に近代の科学思想の洗礼を受けた人間はそれを無視し又は理解出来たつもりでいるが、決して過去を単なる過去として葬り去ることは出来ないことを示しているようである。初期に示された、例えば *Under the Greenwood Tree* の聖歌隊 (Mellstock Quire) の衰亡に対して示されたあの限りない愛惜の情は上述のような形で再現され、*Tess of the d'Urbervilles* で最も明確に表現されて来ているとみることが出来る。つまり Tess という女性の一生は、とりもなおさず過去の重圧に動かされ、それに気付いてその絆を断たんとして懸命な努力をし、遂に屈した悲劇的な生涯の物語りだとも言うことが出来よう。

Tess の悲劇の発端は、父親が牧師から祖先は William the Conqueror と共に Normandy から渡って来た Knight の一人 Pagan d'Urberville の末裔で、この地方の至る所に荘園を持っていた過去の栄光に輝く名門で、Kingsbere の納骨堂に収っていると聞くことから始まる。老馬 prince を唯一の財産とし、Tess を頭に七人の子供を持ちながら病弱で、働きがなく酒飲みで無知な父親、子供の世話に汲々とし、多くの迷信、伝説、口伝の民謡をかかえ込んで全く知性のない唯物的母親にとって、この知らせは全くの救いであった。そこで無意味な己惚れと Alec d'Urberville へ Tess を親戚名乗りにやることによって経済的援助をも期待するという風に、過去の名門の意識が一度に生じ、それが愚かな幻想を生む。そして全く 'a mere vessel of emotion untinged by experience'¹⁾ である Tess に過去の栄光と両親の持つ過去の環境に培われた物質的な俗物根性が覆いかかって来る。*The Woodlanders* の Hintock の村が 'one of those sequestered spots outside the gate of the world' であるように、この Marlott の村も Henry III の時代の名残りをとどめ 'Even now, traces of its earlier condition are to be found in the old oak copses and irregular belts of trunked trees' で、多くの習慣が 'in a metamorphosed or disguised

1) Thomas Hardy : *Tess of the d'Urbervilles*. p. 13. (Macmillan, Library Edition)
以下本文中の引用ページ数はこ Text による。

form' として残っている地域である。¹⁾ 従って変化の少いこの村には 'It was to be' (p. 91) という宿命的な過去の因習的な思想が漂っている。こういう社会環境でのこういう両親の中に、この牧師の言葉によってその過去が新たな装いで生き返って来る。従って両親の考えたことは過去を再生し未来に通じる夢を見出したことであり、Tess がその過去と未来に続く現在を結びつける役割を果たすものとして意義を持って来ている。それ故 Tess は Grace と同様に決して両親のように過去のもつ幻影に踊らされたのではないけれども、自分が意図しようとしなにかかわらずこの過去の力に駆立てられて現在を未来へと歩まざるを得ない。

ここにもやはり過去の生命体としての作用の表現を見ることが出来る。そして Alec の所へ趣き、犯されて人生の辛苦を味った末、結局自分の生きる道は自分の祖先の持つ過去の栄光は勿論、因襲という過去の持つ社会通念、自分自分の犯した過去一切を葬り断絶することであると決心するようになる。Talbothays への出発はその一つの試みであった。

To escape the past and all that appertained thereto was to annihilate it, and to do that she would have to get away. (p. 126)

然し Clare と知り合い再び過去を意識し始める。 '...if there's one thing that he do hate more than another 'its the notion of what's called a' old family....' (p. 163) と Clare に関して述べる牧場主 Crick の意見をきき、彼 Clare も過去を抹殺していることに安心して結婚へ進む。二人が町で結婚準備の買物をしている時、Tess は顔見知り合い、やはり過去から今尚脱出していないのを悟る。

'We shall go away, a very long distance, hundreds of miles from these parts, and such as this can never happen again, and no ghost of the past reach there.' (p. 266)

1) D. Cecil が 'Wessex life was too unchanging, too uneventful, for people to forget the past' (*Hardy the Novelist*. p. 18) と述べているように Hardy も過去を無視することが出来ない。

こう考えながら結婚し新婚旅行に出発する。所がその第一夜を過ごすべき家がかつての名門 d'Urberville の荘園屋敷の本陣であり、その館の踊場の壁にはめこんである200年前の d'Urberville 家の婦人の怪奇な肖像に遭遇し肝を冷やす。そしてやっと二人で過去の絶対の断絶を願って話しあったその過去の告白が、逆に Tess の上に単なる過去の過失のみでなく先祖の一切の歴史をも含めて改めてまた悉く崩れかかって来る。

'I repeat, the woman I have been loving is not you.'

'But who?'

'Another woman in your shape.' (p. 293)

こう言う Clare は自分が欺かれていたとばかり思い自己の内に巢喰う観念的 egoism に気付かない。そして次のように述べる。

'...I think that parson who unearthed your pedigree would have done better if he had held his tongue. I cannot help associating your decline as a family with this other fact—of your want of firmness. Decrepit families imply decrepit wills, decrepit conduct. Heaven, why did you give me a handle for despising you more by informing me of your descent! Here was I thinking you a new-sprung child of nature; there were you, the belated seedling of an effete aristocracy!' (p. 297)

つまり Tess が自己保存の為に欺いたのだとし、それは精力を使い果してしまった没落貴族の老いぼれの行為と意志だとして Tess の祖先(過去)と結びつけて考えている。Clare できえ過去に帷をおろすことは不可能である。このように Hardy は過去の絆を完全に断ち切った人間存在は考えられないのである。

何故か。それは過去が無形の生命体として事象の背後に生きているからである。この目に見えぬ実在は先程触れたように自然、古い館、迷信の中に生きている。例えば Hardy が遺伝の問題に関心を示していることは Duffin

等も指摘する所であるが,¹⁾ それもこう言う考え方の一つの具体的な表現でもあろう。例えば John Durbeyfield の顔を見て牧師はそこに d'Urberville 家の面影を見る。

‘Throw up your chin a moment, so that I may catch the profile of your face better. Yes, that’s the d’Urberville nose and chin —a little debased....’ (p. 4)

又 Tess が Clare と新婚の夜、d’Urberville 家の婦人の肖像を見て嫌う理由の一つは Tess の容貌をその原型に辿ることが出来るからである。

The unpleasantness of the matter was that, in addition to their effect upon Tess, her fine features were unquestionably traceable in these exaggerated forms. (p. 277)

これらは又迷信という型をとっても表現される。例えば新婚旅行に向う馬車について Tess はこの馬車は以前に夢の中であろうか、見たことがあると言う。これ対して Clare は次のように述べる。

‘... A certain d’Urberville of the sixteenth or seventeenth century committed a dreadful crime in his family coach; and since that time members of the family see or hear the old coach whenever —.’ (p. 272)

これは一つの伝説的な迷信として説明されたものであるが Tess が古い馬車を現実に見て ‘... I seem to have seen this carriage before, to be very well acquainted with it. It is very odd — I must have seen it in a dream.’ (p. 272) と言う時、Tess 自身 ‘very odd’ と言うように古い馬車を通してその祖先の犯した過去の罪が Tess の意識の中に神秘的な影響を及ぼしていることを示している。しかもこれは Tess の結婚の破綻を表わす不

1) cf. H.C. Duffin : *Thomas Hardy*, p. 146. 及び E. Blunden : *Thomas Hardy*

吉な前兆として用いられている。このことは更に繰り返して述べられる。Tess が最後に Marlott の家に帰り、父の死によって借地権が切れ Kingsbere へ引越する時である。Alec が馬でやって来るがそれに気付かずぼんやりしていて何か馬車の音を夢見心地に聞いたのだと Alec に話す。

'I heard you, I believe, though I fancied it was a carriage and horses. I was in a sort of dream.'

それに対して彼は Clare と同じような説明をする。

'It is rather dismal. It is that this sound of a non-existent coach can only be heard by one of d'Urberville blood, and it is held to be of ill-omen to the one who hears it. It has to do with a murder, committed by one of the family, centuries ago'...' One of the family is said to have abducted some beautiful woman, who tried to escape from the coach... and in the struggle he killed her—or she killed him—I forget which.' (p. 452)

ここでは新しい意味が加わって来ている。前の場合は実際に馬車をみたのであるが、今度は Alec の馬であったがやはり馬車だと感じたのである。しかも今度は 'It has to do with murder.' だと述べられ、'he killed her—or she killed him.' と愈々 Tess が過去の d'Urberville 家の血統を引いていることに間違なく、その血の中に過去の祖先の犯した罪が今なお Tess の内に現実に再現されて来つつあることを暗示し、増々神秘的な色合をおびて来る。そして実際この ill-omen は最後に Tess を誘惑して犯した Alec を殺害するという形で実現される。

これに類する例は *The Woodlanders* で Marty が髪を切り落した時、その祖先がやはり髪を切り落された姿を恐れたことを思い起し、鏡をみるのを恐れるという形で表現されている。

She dreaded it as much as did her own ancestral goddess the

reflection in the pool after the rape of her locks by Loke the Malicious. 1)

Marty の祖先は Teuton 人でその昔の北歐神話に出て来る話が彼女の意識の中に働いて、現実の姿と結びつけられている。この様に過去のことを時間的な我々の概念を超越した力で現在に及んでおり、それが Tess の場合にも一つの予言として用いられている。Marty の父親が自分の死と自分の育て上げた樹との間に知性の理解を越えた交感を感じ取り、‘...that tree will soon be the death of me’ 2) と述べ、実際に樹を切り倒すと彼も死んでしまう例が *The Woodlanders* にある。この様に Hardy の場合、過去が現在に生命体として目に見えない形で生きているという認識と表現が、更に神秘的な形で心靈現象にも似た形で Tess に影響を及ぼしている。これ迄にクリスマスの Mummery, 冬前に行われる Bonfire, 蠟人形に針を刺して火あぶりにする呪詛, Midsummer-Eve, skimmity-riding 等を初めとする様々な迷信、過去の風俗習慣が至る所に散見出来るが、これらも総て Hardy の過去に対する愛着と現代にさえ生きているという姿の表現に他ならない。

Hardy は *The Return of the Native* を書くに当って次のようなことを意図していたことを1878年4月22日の日記に記している。

‘...the beauty of association is entirely superior to the beauty of aspect, and a beloved relative’s old battered tankard to the finest Greek vase. Paradoxically put, it is to see the beauty in ugliness.’ 3)

つまり彼は連想の美を強調している。しかもそれは長年耐えて、たとへ外観は醜くとも今尚現存する姿と、それが親しい人間の手に触れたものとして何等かの人間との有機的な関係をもその間に連想することによって、美——生命——が与えられることを述べたものである。これは彼の創作の基本的特徴を

1) Hardy : *The Woodlanders*. p. 21

2) *ibid.* p. 13.

3) F. E. Hardy : *The Life of Thomas Hardy*. p. 120~121.

示すものと見做すことが出来る。従って Egdon の創造と同じように壊れかかった教会や館も、その彼の連想によって一つの生命を与えられているのである。つまり過去との連想によって過去が生き神秘的な生命を持って来て人物に作用を及ぼすという表現になって来る。この様にして現実に甦った過去は人間の意識を絶えず抱束し引きつけ、たとえどんなに逃れようとしても逃れることは出来ない。Grace を Fitzpiers に、Tess を Alec に、Sophy を Twycott にと「幾千年も重ねた分析的な哲学も我々の秩序の意識に納得のゆくように」説明することの出来ない力で結びつけ、若しそれから脱出しようとする程悲劇の深淵へと追いやられる。Tess が結局過去を忘却、遮断出来ず最後に 'older than the centuries; older than the d'Urbervilles' である 'The heathen temple' (stonehenge) に帰って行ったことは Hardy のこの過去への関心を象徴するものであろう。

We two kept house, the Past and I,
 The Past and I;
 Through all my tasks it hovered nigh
 Leaving me never alone.
 It was a spectral housekeeping
 Where fell no jarring tone,
 As strange, as still a housekeeping
 As ever has been known.²⁾

と詩でも歌っているように、彼は過去を無視しては物事を見ることが出来ず、これこそ彼のいう reality—the real being invisible の一面であったのである。こうして過去を捨てて新しい世界に生きようとしながらもその過去が現代に結びついているという矛盾が、当時の時代を背景としながら神秘的な色合を帯びて表現されている所に彼の一つの特徴である melancholy romanticism があると思うのである。

-
- 1) cf. H.B. Grimsditch も 'Buildings again are given a personality' と述べている。
 (*Character and Environment in the Novels of Thomas Hardy*, p. 51)
- 2) Thomas Hardy : *The Ghost of the Past* (*Lyrics and reveries*)